

分野別方針 5 文化

～世界的な文化芸術都市として創生することを目指す～

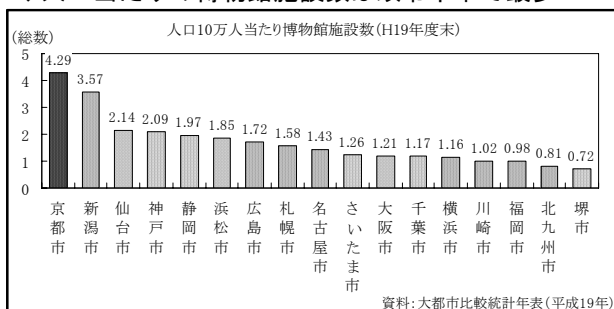
基本方針

文化芸術が、暮らしの中にいきいきと息づくとともに、そこで生まれる活力やにぎわいが、まちの活性化につながることを目指し、文化芸術とまちづくりを一体化させた取組を促進する。このような取組を通じて、京都を新たな魅力に満ちあふれた世界的な文化芸術都市として創生する。

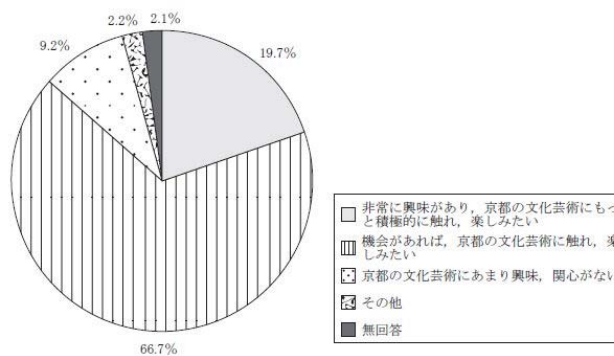
現状・課題

- 本市は、他都市に比べて、豊かな文化資源を有する。芸術系大学が集積するなど、人材育成の機能も充実しており、市民、旅行者からも、文化芸術のまちとして広く認知されている。
- 機会があれば、京都の文化芸術に触れ、楽しみたいという市民が多い。
- 市民、行政、芸術家、企業等が京都の文化芸術を支える力として、それぞれ特色ある取組を進めているが、それらの力が必ずしも全体としての向上に結びついていない。
- 「文化芸術と人々の生活や地域との密接なつながり」という京都の特性が希薄化しつつあり、次世代に引き継がれないおそれがある。
- 国内外で「文化芸術によるまちづくり」が進められる一方、都市化の進展等により、伝統行事の保存継承が困難となったり、歴史的価値の高い建造物や庭の消失が進んだりするなど、更なる取組の展開がなければ、本市の、相対的な地位の低下が生じ得る。
- 文化財の保存に係る経費や人材などの支援基盤が脆弱であることから、国の更なる財政的支援や文化財を保存・活用するための専門的能力を有する人材の育成などが必要である。

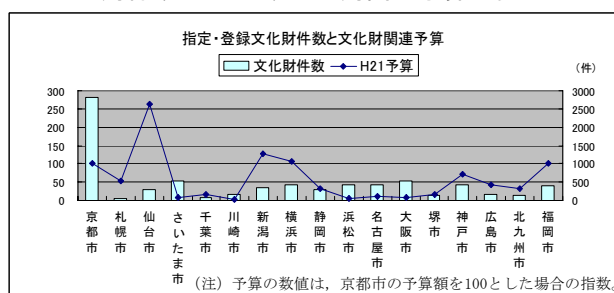
◆人口当たりの博物館施設数は政令市中で最多



◆京都の文化芸術に触れ、楽しみたいと思う市民の割合が8割以上 文化芸術に対する興味・関心について



◆文化財件数に比して、文化財関連予算は少ない



政策の目標

<みんなで目指す10年後の姿>

- 伝統的な文化芸術を継承・発展させ「和の文化」として世界に発信し、また、文化芸術の新たな創造活動が活発に行われるなど、文化芸術に関わる活動が盛んなまちとなっている。
- 文化芸術が市民の生活や、身近な暮らしの場である地域の中にしっかりと根付くなど、日常生活シーンの中に文化芸術が見られるようなまちとなっている。
- 産業、大学との結びつき、独自の都市景観を生かすなど、文化芸術によって社会全体が活気づくようなまちとなっている。
- 文化財の指定・登録が更に進み、文化財の保存、活用に対する支援の輪が広がるなど、文化財が社会全体で守られ、地域の活性化にもつながるまちとなっている。

<政策指標>

	指標	現況値	目標値
1	「創作・表現」活動を行っている市民の割合	46.1% (H18)	51.0%
2	芸術文化を「鑑賞」する市民の割合※ ¹	28.4% (H18)	31.0%
3	文化施設の年間入場者数	2,892千人 (H20)	3,200千人
4	市指定・登録文化財の数	468件 (H20)	550件

※1 月に1回以上鑑賞をしている方の割合
(単に鑑賞しているという方は既に8割を超えるため、頻度も問題にする。)

市民と行政の役割分担と共汗

